平成24年度「全国学力・学習状況調査」の状況をお知らせします

北斗市教育委員会

今年、4月17日に北斗市の全ての小学校6年生と中学校3年生を対象に実施した「全国学力・学習状況調査」の状況をお知らせします。

調査の内容は、国語と算数及び数学、理科について、「基礎的知識・技能」に関する問題A、「知識・技能の活用」に関する問題Bによる学力調査と生活習慣や学習環境等の学習状況調査となっています。

なお、この調査は、国語と算数及び数学、理科のみについて行っていることや「知識」と「活用」にポイントをおいて実施しているため、調査の結果が学力のすべてではなく、一部について示しているものであることをご理解いただきますよう、よろしくお願いいたします。

《小学校》全国、全道との比較

●調査参加児童数　463名

本市児童の、平均正答率は、全道平均と比較し、国語A及びBは同様で、算数A・Bはほぼ同様(下位)、理科は同様でした。

全国平均との比較は、理科は3ポイント下回り、国語A・Bが5ポイント、算数A・Bは6ポイント下回りましたが、点数の差が縮み、全道とともに改善の傾向がみられてきています。

【国語A　主として知識】

●北海道平均正答率77・4%

学力の定着度は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」がほぼ同様(下位)で課題がみられます。「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が同様でした。

漢字を正しく読む問題では「建築」の平均正答率は90・3%となっており、全国平均を1ポイント上回っています。

漢字の書き取りの問題では「たいよう」の平均正答率は、79・3%となって同じく全道平均を0・6ポイント上回っています。

百科事典の使い方については、「百科事典を読み、目的に応じて中心となる内容を捉える」設問でしたが、全道平均を1ポイント上回りました。

一方、「参加することをゆるす」を漢字で書く設問では、正答は、「許」となり、全道正答率を3・3ポイント下回り、低い結果となっています。

小学生は、資料を読んで内容をまとめたり、自分の考えの理由を正しく書いたりする問題に課題がみられました。

合唱コンクールの取材メモを基に新聞記事のリード文を書く問題の正答率は35・0%でした。

必要な要素を落としたり、一文で書くという条件を満たしていない児童が目立ちました。

今後は、目的や意図に応じ、必要となる事柄を整理して簡潔に書いたり、伝えようとする内容を明確にして書いたりする学習が必要です。

【国語B　主として活用】

●北海道平均正答率51・1%

学力の定着度が「書くこと」「言語事項」で全道的に課題がみられました。また、無解答率が一部の設問を除き、全国平均とほぼ同程度の傾向になり、改善の様子が表れています。

左の設問②は、目的や意図に応じ適切に敬語を使いながら、内容の中心を明確にして書く力を問うものです。敬語（相手に敬意を表す言葉）を用いて、「お返事には」に続くように、六十字以上八十字以内にまとめて書く条件を満たし、的確に述べた児童の全道平均正答率は、44・6%であり、1・8ポイント下回る結果でした。記述式の問題で、自分なりに考えをまとめて決められた字数で表現する力が、昨年と同じ様に課題が残ります。

> ② 平川さんは、本文の B の中に、宮本さんからどのようにして返事をもらうかということについて書こうとしています。
> 次の【平川さんが書いたメモ】の内容をもとにあとの条件に合わせて書きましょう。
> 【平川さんが書いたメモ】
> ●返事のもらい方…ふうとうの中のはがきを返事に使ってもらう。
> ●返事の内容…ほう問ができる場合→六月の土曜日か日曜日で、宮本さんのつごうがよい日時をはがきに書いてもらう。
> <条件>
> ○敬語（相手に敬意を表す言葉）を用いて書くこと。
> ○「お返事には、」に続くように、６０字以上、８０字以内にまとめて書くこと。

昨年の結果と同じように、書いてまとめる活動や「○○字以内で」「敬語を用いて、～に続くように」など、示された条件に応じて書く能力を高めるため、日常の宿題などで単文にまとめて書く学習が必要です。

【算数A　主として知識】

●北海道平均正答率68・7%

学力の定着度が全道正答率と比較して、「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」領域でほぼ同様(下位)となりました。

計算問題で、過去の調査結果と比較して、平均正答率がほぼ同様(下位)の傾向がみられます。

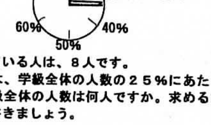
四則計算では《6×2＋8×3》84・0%、《132＋459》96・5%と全国平均を上回るなど、H22年・H23年の類似問題と同じく高い結果となっています。

一方、畑で五日間にとれたトマトの数から一日平均の「収穫数」を求める問題や三角形の底辺に対応する「高さ」を選ぶ問題では全道平均を3～6ポイント下回り、数量や図形についての知識や理解に課題があります。分数の除法や減法の計算については、今後も基礎基本の確実な定着への取り組みが必要です。

120cmの赤いテープの長さが、白いテープの0.6倍に当たる際の長さの関係を示す図を選ぶ問題では、全道平均正答率が29・8%で、3・5ポイント下回り、正答率は低い状況にあります。

表を用いて、二つの数量の関係が比例の関係にあることを理解する設問⑨は、全道平均正答率が81・4%で、10・6ポイント下回っています。百分率の意味を理解する設問⑧は、全道平均正答率が49・3%で、2ポイント下回っていますが、昨年と同様な問題での正答率より高い状況にあります。グラフを見て割合を読み取る力は確実に定着していますが、二つの数量関係を問う設問では、全道との正答率の差が大きい状況にあります。

⑧ 下の円グラフは、学級全体の人数をもとにして家で犬を飼っている人の割合を示したものです。



犬を飼っている人は、８人です。
この８人は、学級全体の人数の２５％にあたります。学級全体の人数は何人ですか。求める式と答えを書きましょう。

百分率の意味や割合の考えの良さを理解できるように、日常生活で二つ以上の事象の大きさを比べるときには、量で比べる場合と割合で比べる場合があることを理解し、目的に応じて適切に使い分けられるよう指導していく必要があります。

【算数B　主として活用】

●北海道平均正答率54・3%

学力の定着度が全道正答率と比較して、すべての領域でほぼ同様（下位）でした。

④(2)情報を読み取る問題の69・5%、支払い方法からおつりの硬貨の種類と枚数を比べる問題の90・9%については、過去の調査結果と比較し平均正答率が高い結果となりました。

しかし、設問②(3)《二種類の跳び箱を30cm高くすると同じ高さにすることができるかどうか判断し、そのわけを書く》の正答率は全道より2・8ポイント低く、ともに課題が残りました。

次に設問⑤(3)は、表から適切な数値を取り出して、割合の大小を判断し、その理由を言葉や式を用いて記述する問題です。

数量や図形についての設問では、わけや違いなどについて、言葉や式で表すことは、誤答が多く、無記入が多い傾向にあります。

過去の類似問題の結果も同じく、表から適切な数値を取り出して割合の大小を判断し、その理由を言葉や式を用いて記述できず、全道と共に低い状況にあります。

示された表や図を基に、そのわけや式を書く記述式問題に課題がみられます。

問題を解くために、自分の考えたことを言葉や数、式、グラフ、図などを活用して表現したり、説明することができる取組みが求められます。

【理科　知識と活用】

今年度、はじめての実施でした。学習指導要領の領域は次の①物質　②エネルギー　③生命　④地球の4領域です。出題は、「主として知識（7問）」「主として活用（17問）」です。

●北海道平均正答率58・6%

学力の定着度が生命・地球・物質の領域が全道平均と同様、エネルギーの領域はやや低い結果でした。生命の領域では全道を0・3ポイント、地球の領域では0・6ポイント全道平均を上回る結果となりました。

H24年度は、観察・実験の結果を整理し考察する問題が多く出題されていますが、問題や図表から情報を読み取り、科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりすることに課題がみられました。

物質の性質を正しく捉える問題「氷砂糖を水に溶かしたときの重さ」の問題では、平均正答率は80・3%で全国平均正答率を上回り、「虫眼鏡の使い方」「植物の受粉」「方位磁針の名称」「かげの観察記録」等も全国平均を上回りました。

一方、設問③(1)「光電池や乾電池の働き」では、正答は「光」3・4ポイント、「直列」は5・8ポイント全道平均正答率を下回りました。

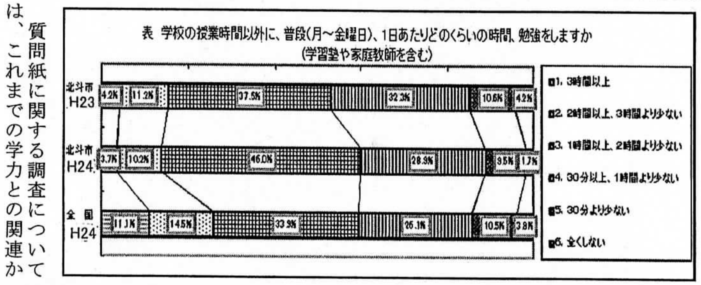
設問③(3)並列つなぎについて、乾電池の向きと車の方向とを関係づけて分析する設問では、全道平均正答率を5・5ポイント下回りました。

設問③(5)水は、温度によって状態が変化する性質を、物を動かす「エネルギーの見方」として適用できるでは、全道平均正答率を2～4ポイント下回りました。今後、エネルギーの領域については、①実験結果を分析して、全体の傾向や共通性を捉えて考察②新たな場面において、条件を制御しながら実験を構想③水の状態変化を「エネルギーの見方」として捉えて考察することが必要です。

今後は、新たな場面において、問題点を把握し、解決方法や問題の解決まで想定して学習することが必要です。

【児童質問紙から】

表　学校の授業時間以外に、普段(月～金曜日)、1日あたりどのくらいの時間、勉強をしますか
(学習塾や家庭教師を含む)



質問紙に関する調査については、これまでの学力との関連から児童の現状を継続して把握し、改善点や今後の課題解決に向けて経年の推移をみております。

表1の「授業以外の一日当たりの勉強時間」は、H23年に37・5%の1時間～2時間の学習時間が8・5ポイント増え、全くしない児童もH23年に4.2%がH24年1.7%に減少しました。市内小中学校で取り組んだ家庭学習に改善の傾向がみられます。

家で、学校の宿題をしていますかは、宿題をする生徒は94・2%、全くしていない児童は1・1%になっています。家庭学習の大事さが見えてきます。「家庭学習の手引き」の成果が表れています。

一方、平日にテレビやビデオを「三時間以上」見る47・5%、テレビゲームを「2時間以上」する30・7%で、昨年と同じく高い傾向にあります。家庭生活の見直しが必要なことを示しています。

家で、学校の授業の復習をしている児童は、71・1%になっており、大幅に増えています。間違えたところや過去の問題をやり直す学習習慣は良い傾向になっています。

【学校質問紙から】

学力向上の取組に関する結果では、国語や算数の指導として家庭学習の課題（宿題）を与えた学校の割合は、昨年と同じく100%で、全道・全国平均を上回っています。

・家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図っている学校の割合は、全国・全道の平均を上回り、全ての学校で実施されています。

・家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えるようにしている学校は、全国・全道平均を上回る100%の実施になっています。

・放課後を利用した補充的な学習サポートを実施する学校が昨年に引き続き増加し充実した取組になっています。

・長期休業日を利用した補充的な学習サポートは、全ての学校で延べ3日～14日ほど実施しています。学力向上に向けて各校の取組に充実が図られています。

・授業研究を伴う校内研修を昨年度は、15回以上実施する学校もあるなど、授業力を高める研修が増加しています。

全ての学校が学力調査結果を分析し、個々の子どもたちに応じた指導を充実させ「オール北海道で目指す目標」を掲げ、16校の連携と協力で達成に努めております。

北斗市では、22年度から、小中学校の連携協力を重視し、各中学校区毎の連携を16校すべてで実施しております。9年間を見通し、学力向上や基本的生活習慣の確立を目指し、指導方法や指導体制の工夫で授業改善に努めております。

以上、小学校の調査結果の概要をお知らせいたしました。

平成24年度は、全国・全道の調査が実施されました。今回の調査の結果を踏まえ、学校や保護者・地域の皆様とともに北斗市の子どもたちの学力や生活習慣の現状をご理解いただくための文章表記についてお伝えいたします。

全国・全道との差が1ポイント未満を「同様」、1ポイント以上3ポイント未満を「ほぼ同様（上位）（下位）」、3ポイント以上5ポイント未満を「やや高い（低い）」という表記で示しております。

北斗市の子どもたちが、「社会で自立していくために必要な確かな学力と、それを支える豊かな心と健やかな体」をはぐくむために、これまでの学校・家庭・地域における子どもとの関わりの成果や課題を共有し改善に努めて参りたく存じます。

平成24年度「全国学力・学習状況調査」の状況をお知らせします

北斗市教育委員会

今年、4月17日に北斗市の全ての小学校6年生と中学校3年生を対象に実施した「全国学力・学習状況調査」の状況をお知らせします。

調査の内容は、国語と算数及び数学、理科について、「基礎的知識・技能」に関する問題A、「知識・技能の活用」に関する問題Bによる学力調査と生活習慣や学習環境等の学習状況調査となっています。

なお、この調査は、国語と算数及び数学、理科のみについて行っていることや「知識」と「活用」にポイントをおいて実施しているため、調査の結果が学力のすべてではなく、一部について示しているものであることをご理解ねがいます。

《中学校》全国、全道との比較

●調査参加生徒数：476名

本市生徒の平均正答率は、北海道平均と比較し、国語A及び、数学A・Bが0・1〜0・6ポイント上回り、理科が同様、国語Bで1・9ポイント下回りました。全国平均との比較は、国語Aが同様、他は0・7〜2ポイント下回りましたが、全道・本市ともに点数の差が縮み、改善の傾向がみられます。

今年度は、記述式問題における課題がみられています。

【国語A　主として知識】

●全国平均正答率75・1％

学力の定着度がすべての領域で全国・全道平均と同様でした。「書く」「話すこと・聞くこと」領域は昨年度、僅かに課題がありましたが、今年度は文脈に即して漢字を書く・読むは6問中3問が全国・全道平均を超えています。例えば、**『地域の人をショウタイする』（招待）**の書き取りは全国正答率を0・8ポイント全道正答率を9・6ポイント上回りました。

歴史的仮名遣い**『あらはす』**を現代仮名遣い**「あらわす」**に直して読む設問では、94・5％と高い正答率となり全国を2ポイント上回りました。

一方、**「比喩」**という言葉と結びつけて、表現の仕方を理解する左の**設問**$\boxed{3}$二では、全国・全道・本市ともに課題がみられました。

『この村の月は、まるでよく熟した夏ミカンだ』という文に使われている表現技法を「**比喩**」や「たとえ」と書けた正答率は39・3％と低い結果でした。

しかし、今回の生徒がH21年度（小6年）に出題された類似問題と比較すると正答率は高く無解答率が低くなり全国との差が縮んでいることがわかります。

また、「**倒置法**」「**擬人法**」の誤答も一定程度おり、今後、小学校での学習も踏まえ、表現の技法の知識の定着が必要です。漢和辞典を活用し、漢字の意味を正しく捉えているかをみる設問の正答率は全国・全道とほぼ同様でありH23年度の課題に改善の傾向がみられます。

【国語B　主として活用】

●全国平均正答率63・3％

学力の定着度が「話す・聞く」「読む」領域で全国・全道平均とほぼ同様。「書く」領域でほぼ同様（下位）となりました。

左の**設問**$\boxed{1}$三は、作家の大岡玲さんと壇ふみさんの『**美しい日本語とは**』をテーマにした対談の内容です。

> 三　この対談を読んで、あなたは、これからどのような言葉の使い方をしたいと考えますか。次の条件1から条件3にしたがって、あなたの考えを具体的に書きなさい。
> 　なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。
>
> 条件1　対談での大岡さん、壇さんのいずれかの発言の内容を取り上げて書くこと。
> 条件2　これから使っていきたい言葉の例を挙げて書くこと。
> 条件3　八十字以上、百二十字以内で書くこと。

『どのような言葉の使い方をしたいのか』を条件に合わせて自分の考えを具体的に書く力を問うものです。条件を満たし、的確に述べた生徒の正答率は、全国・全道・本市ともに同様の3割を切る低い結果となりました。さらに、H23年度の無解答率が20・2％、H24年度は22・6％と過去の調査結果も高く、長文を根気強く読み取り書く力が低い状況にあります。

これまでも、その改善策として①目的や意図に応じて、資料に書かれている情報の中から必要な内容を選ぶ②示された条件に応じて話したり書いたりする学習活動の取り組みを継続して取り組んできています。

【数学A　主として知識】

●全国平均正答率62・1％

学力の定着度が全国正答率と比較して、「数と式」、「図形」領域がほぼ同様「数量関係」領域で0・1ポイント上回りました。

「数学的な表現・処理」や「数量、図形の知識・理解」についても全国・全道正答率とほぼ同様でした。

正負や文字式を用いた計算や簡単な連立二元一次方程式は相当数の生徒ができていました。

① $6-(-7)$　「正答率　85・9％」
② $(7x+5y)-(5x+2y)$　「正答率　78・9％」
③ 連立方程式 $\begin{cases} a+b=8 \\ 2a+b=11 \end{cases}$　「正答率　81・7％」

各学校における基礎的な定着に向けたチャレンジテストの活用や繰り返し学習等の成果と思われます。

また、「方程式の解が問題の答えとして適切であるかどうかを調べる」方法の理解力不足や「資料の読み取り」で理由を説明したり、情報を読みとる力が定着していないことに課題がみられます。さらに、小学校の「比例」「反比例」の学習内容と系統性のある一次関数等の考え方を見いだす設問の正答率が低い状況にあります。

小学校の学習内容を踏まえた9カ年を見通した指導計画で、小・中学校が連携した取組を充実する必要があります。

【数学B　主として活用】

●全国平均正答率49・3％

学力の定着度が全国正答率と比較して、「数と式」でほぼ同様、「図形」「数量関係」は同様でした。「数学的な表現・知識」は、全国・全道平均を0・8ポイント上回っています。

今回、初めて出題された**設問**$\boxed{3}$（1）**『ヒストグラム』**では、情報の適切な選択と数学的な表現を用いた記述式問題の正答率が42・9％。また設問$\boxed{5}$（3）は、**『江戸時代の数学書で紹介されている方法を使って木の高さの求め方を説明する』問題**で正答率は18・5％、無解答率が51・6％と高く、全国・全道同様の結果となりました。

しかし、「図形」領域の作図の手順や図形の特徴を的確に捉える設問では88・0％。**『正十二角形の一つの外角の大きさを求める』設問**の正答率は、81・1％と高い正答率となりました。H23年でもグラフの読み取り（72・9％）文字式を使った立式（70・3％）の問題で、過去の調査結果と比較しても正答率が年々高まる傾向にあります。

課題となるのは、すべての教科における言語活動を充実させることで情報を読み取って考察したりまとめて記述する力を定着させることが必要です。

【理科　知識・活用】

今年度、はじめての実施でした。学習指導要領の領域では、①物理的②化学的③生物的④地学的の4領域です。出題内容は「主として知識（10問）」「主として活用（16問）」でした。

●全国平均正答率51・0％

学力の定着度が生物的領域・地学的領域で全国・全道平均と同様。物理的領域・化学的領域でほぼ同様でした。

生物的領域では、全国との差が0・1ポイントと縮んでいます。

H24年度は、「観察・実験」を踏まえた問題が多く出題されていますが、問題文や図表から情報を読み取り、適切な表現で説明し解答する力が十分に定着していない傾向にあります。

物理的領域の豆電球と発光ダイオードを用いて、適切な電流回路をつくる実験の方法を検討し、科学的な根拠を基に、文中の誤りを正す実験方法を説明する下の**設問**$\boxed{2}$（2）は、全国・全道・本市すべての正答率が10％を割る低い結果となりました。

また、直列つなぎと並列つなぎ、電流と電圧の違いを正しく理解していないとみられる誤答も多く、「**電圧を流す**」という不適切な表現がみられました。

地学的領域の地層のつながりや成り立ちを調べるための地層観察の技能と知識に関する設問は、86・3％と高い正答率です。

生物的領域の「**チューリップの花が開くには温度が関係している**」という考察の根拠となる実験結果の組み合わせを正しく選べた生徒は32・6％と全国・全道・本市ともに低い正答率となりました。

自分の考えを言葉で表現する力が問われる記述式問題が理科においても課題がみられました。

また、観察・実験を計画する学習活動や結果を分析し解釈して説明する力の定着が必要です。

> レポート2　続いて昌夫さんは、図1の豆電球を発光ダイオードに交換して、実験1と同様に実験2を行いました。（レポートの一部が掲載されていますが省略します。）
> 　実験を終えて。昌夫さんは先生と話をして考察をしました。
> 考察1
> 先生：昌夫さんは、実験1、2を別々に行い、その結果をまとめたのですね。ところで、家庭では、いろいろな電気器具を同時に使いますね。家庭の回路のように、豆電球と発光ダイオードを1つの回路で同時に使用しても測定できますね。このように、1つの回路で、実験1、2と同じ結果を得るためにはどのような回路をつくって測定すればよいですか。
> 昌夫：豆電球と発光ダイオードに同じ電流を流すために、それらを直列につないで測定すればよいと思います。
> （2）　先生の問いかけに対する昌夫さんの考えには、誤りがあります。実験1、2と同じ結果を得るために、下線部を正しく書き直しなさい。

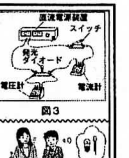


図3

【生徒質問紙から】

質問紙に関する調査については、これまでの学力との関連から生徒の現状を継続して把握し改善点や今後の課題解決に向けて経年の推移をみております。

また下の一覧表は、今年度実施された理科に関する全国の児童・生徒の現状です。

小学校6年生では理科に対する関心・意欲が高く、中学3年生では20〜30ポイントも減少し、内容が難しくなるとともに関心・意欲や理解度が低下している傾向にあり、本市においても同様の結果がみられます。

〈表〉理科についての児童・生徒に対する調査

	小学校	中学校	差
勉強が好き	82％	62％	20％
勉強は大切	86％	69％	17％
授業で学習したことは、将来社会で役立つ	73％	53％	20％
授業の内容はよく分かる	86％	65％	21％
将来、理科や科学技術に関係する職業に就きたい	29％	24％	5％

注：「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合

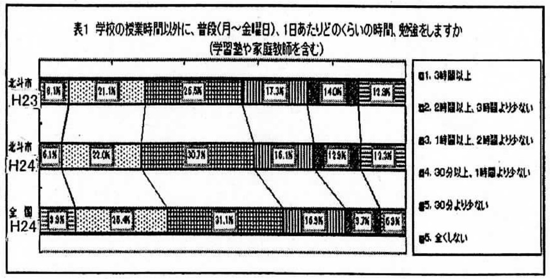
下の表1の平日の家庭学習時間量は、H23年とほぼ同様ですが、全くしない生徒が全国を5・4ポイント上回っています。

・家で学校の宿題を全くしない生徒が4・9％と減少し、平日にテレビやビデオを「3時間以上」見る生徒は、35・6％。H23年に比べ6・4ポイント減少し、家庭生活の見直しが図られてきていると言えます。

また、「長文を読むこと」「原稿用紙に2〜3枚感想文や説明文を書くこと」が難しいと回答している生徒が昨年と同様65％程度います。「自分にはよいところがある」や「将来の夢や目標をもっている」生徒が全国と同様に少なくなっています。

今後のキャリア教育の充実で学ぶ意義や自尊感情、職業観を育むことが必要と思われます。

表1　学校の授業時間以外に、普段(月〜金曜日)、1日あたりどのくらいの時間、勉強をしますか
(学習塾や家庭教師を含む)



【小中連携による指導の必要性】

平成21年度に学力調査を受けた6年生が、今回3年生となり平成21年度と関連した内容が出題されました。

国語においては、A・B問題での類似問題が7問出題されています。漢字・ローマ字の読み書き、語句を選んだり、調べたりする学習内容等です。

数学においては、A問題での類似問題が3問出題されています。数直線上の点が表す負の数の値を読み取る問題や小学校における「量と測定」、「図形」などの知識や理解が求められ学習内容等です。

本市では、すべての中学校区単位で、小学校との学習のつながりを考慮し、小・中連携の充実に努めています。

【学校質問紙から】

・国語や数学の指導として、家庭学習（宿題）を与えた学校の割合は、100％です。

・家庭学習の課題（宿題）について、学校の中で評価・指導をすべての学校が取り組んでいます。

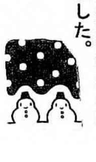
・学習規律の徹底や生徒の思考や表現力を深める発問や指導方法を工夫をしている学校が100％となっています。

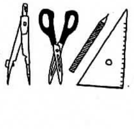
・放課後や長期休業日を利用した補充的な学習サポートは、すべての学校で延べ3日〜14日以上実施しています。地域・学生ボランティアの方々の支援が充実してきています。

・授業研究を伴う校内研修を昨年度は、15回以上実施する学校が増え、授業改善をめざす研修時間が増加しています。

北斗市では、全学校が学力調査結果を分析し、個々の子どもたちに応じた指導を充実させ「オール北海道で目指す目標」を掲げ、16校の連携と協力で達成に努めております。

以上、中学校の調査結果の概要をお知らせしました。





平成24年度は、全国・全道の調査が実施されました。今回の調査の結果を踏まえ、学校や保護者・地域の皆様とともに北斗市の子どもたちの学力や生活習慣の現状をご理解いただくための文章表記についてお伝えいたします。

全国・全道との差が1ポイント未満を「同様」、1ポイント以上3ポイント未満を「ほぼ同様（上位）（下位）」、3ポイント以上5ポイント未満を「やや高い（低い）」という表記で示しております。

北斗市の子どもたちが、「社会で自立していくために必要な確かな学力と、それを支える豊かな心と健やかな体」をはぐくむために、これまでの学校・家庭・地域における子どもとの関わりの成果や課題を共有し改善に努めて参りたく存じます。